

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

一、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふうに川だと言われたり、乳の流れたあとだと言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」先生は、黒板につるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなことも

よくわからないという気持ちです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかつているのでしょう」

ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立つてみるともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になつてしまいました。先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河はだいたい何でしょう」

やつぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、
「ではカムパネルラさん」と名指しました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはり同じもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで、

「では、よし」と言いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう」

ジョバンニはまっ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどころなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋から巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な頁いつぱいに白に点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事がつらく、学校に出てもうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を言わないようになったので、カムパネルラがそれを知つてきのどくがつてわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた言いました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるなら、もつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかに来るで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと言いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮かんでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい」

先生は中にたくさん光る砂のつぶのはいつた大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太

陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒すなわち星しか見えないでしょう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒すなわち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるか、またその中のさまざまの星についてはもう時間ですから、この次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭りなのですから、みなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい」

そして教室じゅうはしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたが、まもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

ginga-2 (2017-05-06 12:04)

二、 活版所^{かつばんじょ}

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネ
ルをまん中^{こうちゅう}にして校庭^{こうてい}の隅^{すみ}の桜^{さくら}の木^きのところに集^{あつ}まっていました。それはこ
んやの星祭^{ほしまつ}りに青いあかりをこしらえて川^{かわ}へ流^{なが}す烏瓜^{からすうり}を取り^とに行く相談^{そうだん}らし
かったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振^ふつてどしどし学校の門^{もん}を出て来ました。
すると町の家々ではこんやの銀河^{ぎんが}の祭^{まつ}りにいちいの葉^はの玉^{たま}をつるしたり、ひの
きの枝^{えだ}にあかりをつけたり、いろいろしたくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三^{さん}つ曲^まがつてある大きな活版所^{かつばんじょ}にはいつて靴^{くつ}

をぬいで上がりますと、突き当たりの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついて、たくさんの輪転機がばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いておりました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子にすわった人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね」と言いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向こうの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしやがみ込むと、小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次へと拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う」と言いますと、近く四、五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷たくわらいました。

ジョバンニは何べんも眼をぬぐいながら活字をだんだんひろいました。

六時がうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入

れた平^{ひら}たい箱^{はこ}をもういちど手にもった紙^しぎれと引き合わせてから、さつきの卓^{テブル}子^この人へ持^もつて来^きました。その人は黙^{だま}ってそれを受け取^うつてかすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉^{とびら}をあけて計算台^{けいさんだい}のところに来^きました。すると白^{しろ}服^{ふく}を着^きた人がやっぱりだまって小さな銀^{ぎん}貨^かを一つジョバンニに渡^{わた}しました。ジョバンニはにわかに顔いろがよくなつて威^い勢^{せい}よくおじぎをすると、台^{たい}の下^{した}に置^おいた鞆^{かばん}をもつておもてへ飛^とびだしました。それから元^{もと}氣^きよく口^{くち}笛^{ふえ}を吹^ふきながらパン屋^やへ寄^よつてパンの塊^{かたまり}を一つと角^{かく}砂^さ糖^{とう}を一袋^{ふくろ}買^かいますといちもくさんに走り^{はし}りました。

ginga-2 (2017-05-06 12:04)

三、家

ジョバンニが勢いよく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口のいちばん左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いがありたまになつていました。

「お母さん、いま帰ったよ。ぐあい悪くなかったの」ジョバンニは靴をぬぎながら言いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずうつとぐあいがいいよ」

ジョバンニは玄関を上がつて行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の

室^{へや}に白い巾^{きん}をかぶって寝^{やす}んでいたのでした。ジヨバンニは窓^{まど}をあけました。

「お母さん、今日は角砂糖^{かくざとう}を買^かってきたよ。牛乳^{ぎゅうにゅう}に入れてあげようと思って」

「ああ、お前^{まえ}さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

「お母さん。姉^{ねえ}さんはいつ帰^{かえ}ったの」

「ああ、三時ころ帰^{かえ}ったよ。みんなそこらをしてくれてね」

「お母さんの牛乳^{ぎゅうにゅう}は来^きていないんだろうか」

「来^きなかつたろうかねえ」

「ぼく行^いってとつて来よう」

「ああ、あたしはゆっくりでいいんだからお前^{まえ}さきにおあがり、姉^{ねえ}さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置^おいて行^いったよ」

「ではぼくたべよう」

ジヨバンニは窓^{まど}のところからトマトの皿^{はら}をとつてパンといっしよにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつとまもなく帰^{かえ}ってくると思うよ」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの」

「だって今朝けさの新聞に今年は北の方りょうの漁りょうはたいへんよかったと書いてあったよ」

「ああだけだねえ、お父さんは漁りょうへ出ていないかもしれない」

「ぎつと出ているよ。お父さんが監獄かんごくへはいるようなそんな悪いことをしたはずがないんだ。この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈きぞうした巨おおきな蟹かにの甲こうらだのとなかいの角つのだの今だってみんな標本室ひょうほんしつにあるんだ。六年生なんか授業じゅぎょうのとき先生がかわるがわる教室へ持つて行くよ」

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着うわぎをもつてくるといったねえ」

「みんながぼくにあうとそれを言うよ。ひやかすように言うんだ」

「おまえに悪口わるぐちを言うの」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して言いわない。カムパネルラはみんながそんなことを言うときはきのどくそうにしているよ」

「カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、ちようどおまえたちのように小さいときからのお友達ともだちだったそうだよ」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。」

あのころはよかつたなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合わせるとまるくなつてそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、缶がすっかりすけたよ」

「そうかねえ」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家じゅうまだしいんとしているからな」

「早いからねえ」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ」

「そうだ。今晚は銀河のお祭りだねえ」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ」

「ああ行つておいで。川へはいらないでね」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんといつしよなら心配はないから」

「ああきつといつしよだよ。お母さん、窓をしましておこうか」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

ジョバンニは立つて窓をしめ、お皿やパンの袋をかたづけると勢いよく靴をはいて、

「では一時間半で帰つてくるよ」と言いながら暗い戸口を出ました。